



黒滝村国民健康保険(国保)診療所のたった一人の医師として、二〇〇四年七月、夫と八カ月になる長男とともに赴任しました。黒滝村は、〇五年に赤ちやんが一人しか産まれず、少子高齢化の最先端をいく村として新聞、テレビで紹介されたことのある村です。

在宅で4カ月間

診療所では、在宅医療にも力を入れており、ヘルパーさんなどとも連携しながら、二年間で十七人の方を、家でみとらせていただきました。これは、村で亡くなられた方のおよそ五割。今日の日本では、全死者のおよそ八割が病院で亡くなっている。

自宅でのみとりを支えて

ます。がん患者さんに限れば、自宅で亡くなる方は、6%とごくわずかです。

六十四歳の男性Aさんは末期の膵臓(すいぞう)がんと診断され、本人には、今の段階では

手術は難しいと説明がありました。専門の先生と相談しながら、黒滝村国保診療所で抗がん

剤の治療をすることになりました。ご家族も、できるだけAさんの気持ちを大事にしたいと考え、在宅での闘病生活が始まりました。

そして医療者は、それをそばで支えさせていただくのです。家でのみとりは、ご家族にとつて、本当に大変なことです。家族は、大切な人のみとりを、他人任せではなく、自らが行うことで、愛する人が死んでいくという、受け入れがたい状況を、何とかして少しずつ受け止めていっていかれるように思っています。

次第に弱っていかれるAさんを、奥さん、そして三人の息子さんが懸命に支えられました。最後の一カ月は、自分で診療所に来られなくなり、毎日往診をさせていただきました。四カ月の闘病生活の間に、三人の息子さんがどんどんと変わっていかれました。父親は、三人の息子に最後まで生き抜き、死んで行く姿を見せ、それを息子さんたちは正面から受け止めて成長されていったように思います。

昨日、命の教育の必要性が叫ばれています。しかしそれは、誰かに教えてもらって分かるものではなく、身近な人が生き抜いていくことに寄り添って、初めて分かってくることなのかもしれません。

生き抜くそばで

すべての人が家で死ぬことができるわけではありません。病状にもよりますが、家族の介護力も必要です。また本人が、家

横谷医師は異動となり、現在は奈良県立医科大学消化器外科に勤務しています。(次回予定は高知県)

よこたに ともよ **横谷 倫世** 21期生、1998年卒



診療所の看護師の川上さん(中央)と一緒に患者さん宅へ往診。外来診療の合間に、診療所の車に2人で乗り込み、あわただしく出掛ける

黒滝村国民健康保険診療所

【私の勤務地】黒滝村は奈良県の中央部に位置する人口約1100人の山村。林業が盛んだったが、不況や後継者不足のため、年々過疎化が深刻化している。黒滝村国保診療所は村の中心部にあり、医師1人、看護師1人、事務員2人が勤務している。